

アルドリック・ハマ「日本人の目から見た『大東亜線戦争』への道」論評
元城西大学教授 杉原誠四郎

本論は、日本の第二次世界大戦の直前の状況について、日本人は欧米人と全く違った記憶を持っていると指摘して、そのあまりにも大きな違いを明らかにしようとしているものである。欧米人の抱いているものは、端的に言えば、極東軍事裁判（東京裁判）で示された見解を繰り返したものであり、つまりは、犯罪的軍国主義の一派が東アジアと残りの世界を支配するために侵略戦争を行ったというものである。しかし日本は大東亜戦争をする結果にはなったことにおいては変わらないけれども、その結果へと向かう日本のそれまでの在り方は、このような東京裁判でいうような在り方をしていたとは決していけない。そのことを明らかにしたものである。

その違いは何か。簡単に言えば、東京裁判では、日本は中国への侵略行為が戦争に向かう中心の事柄であり、そのことに専念していたのであるが、しかしその時期ともいえる20世紀前半の日本の中心的課題は、日本から見れば、日本国民の生活レベルを上げて、そして欧米との不平等な関係を改善することに努力していたのだ、と指摘している。

本論では、多くの歴史書を渉猟し、その違いを明らかにする歴史的事実やその時の指導的立場にあった者の言動を並べていっている。我々、自虐史観に浸かっていない者にとっては、まことに納得のいくものばかりである。日本人の中には自虐史観にどっぷり浸かっている者もいるが、その人たちでさえ、東京裁判の判決のような単純な見方はしていないから、その点では、自虐史観に冒されている人も、ここで指摘されている歴史的事実やその時々々の指導的立場にあった人の言動を知ることは参考になる。

つまり、大まかには、日本は上記のように、20世紀前半にあつて中国との関りは一部の問題であつて決して中心の問題ではなかった。が、しかし必然的に中国と関わり、抜き差しならぬ状況に追い込まれたのは事実である。が、その間、欧米諸国も中国には関りがあり、それぞれ中国に強い関心を寄せていた。その関りや関心の中で、日本の中国への関りを見ていた。が、その見方には、大いに誤解がともなつた。特に中国に対しては最初から大きな誤りえお冒していたのはアメリカであつた。そしてそれは今日にまで及んでいるといような結論になる。

このように結論は、大いに納得のいくものではあるが、論の進め方としては、もう一つ工夫があつた方がよかつたのではないか。欧米をすべて一度に混ぜて扱うのではなく、アメリカ、イギリス、その他のヨーロッパ諸国というように分けて、なおかつ時系列に沿って論述すれば、もっと分かりやすい論になつた

のではないか。このように主要国別に述べれば、その中心にいるのはやはりアメリカということになるが、巨大国家アメリカの影響は大きく、そのアメリカが最も大きく中国を誤解し、そしてそのために日本の中国への関りについても最も誤解して見ていた、ということがもっとはっきり分かりやすく論述できたのではないか。

本論では、欧米人が理解していた日本の対中の在り方について、欧米人の誤解を解くように親切的な記述が続くのであるが、もしこのように国別に、そしてより一層時系列的に並べ替えて論述しておれば、その間の日本側の欧米に対する手の打ち方、例えば例を挙げれば宣伝戦のまずさなど、日本側にあってももっと工夫すべきことがあったということも容易に指摘できることになったのではないか。

アルドリック・ハマ氏の論は時に現代の問題にも及び、トランプ大統領まで論述の中に出てくるのであるが、第二次世界大戦以降で、アメリカを中心として欧米諸国が最も誤ったのは、20世紀最後の段階で起きた天安門事件に対するものであろう。中国を市場経済の仲間に入れて、市場経済の下で豊かな国にしていけば、中国はやがて国際法を守り、世界を健全に牽引していく巨大な徳のある国になっていくであろう、と予想したことであった。しかし中国はそうならなかった。20世紀前半にも顕著にあったが、中国には中国が固有に持つ「天子・天下」の中華の原理があり、第二次世界大戦後の20世紀後半にあっても、それから外れるものではなく、今日にも及んでいる。欧米人は、中国を見誤っていたということを21世紀になって、やっと気づくところとなったといえよう。

最後にこの結論に参考となる二著を紹介して、この論評を終えよう。中国が「天子・天下」の中華原理から外れなかったということでは、黄文雄氏の『黄文雄の「歴史とは何か」』（自由社 2017年）、アメリカ人が中国を見誤っていたということについては、マイケル・ピルズベリー（野中香方子訳）『China 2049－秘密裏に遂行される「世界覇権100年戦略」』（日経BP社 2015年）である。